

## 第5回狛江市新図書館整備基本構想検討委員会 議事録

日 時：令和4年6月1日（水曜日）午後6時から午後8時まで

場 所 等：狛江市役所防災センター4階会議室

出席委員：鎌田委員長、田揚副委員長、中川委員、川崎委員、大仁田委員（オンライン参加）、厚東委員、北澤委員、山本委員、黒木委員（オンライン参加）、上田委員

欠席委員：秋元委員、河野委員

事務局：細川図書館長、山村副主幹兼図書サービス係長、葛西主任、富岡主任

事業者：株式会社図書館総合研究所 三ツ橋、市村、鐘ヶ江

### 配布資料

資料1：第5回狛江市の新図書館を考える市民ワークショップ配布資料

資料2：第5回狛江市の新図書館を考える市民ワークショップ意見（全録版）

資料3：前回委員会における基本構想骨子案・素案への要望要旨

資料4：新図書館整備基本構想（骨子案）

資料5：新図書館整備基本構想（素案）

資料6：外国人登録者数及び多文化サービスの状況

資料7：図書館等最新事例

参考資料：5月29日中間報告会資料

### 【議事概要】

#### 1 開会

－事務局より傍聴者への対応についての説明を行う－

#### 2 議題

（1）新図書館整備基本構想骨子（案）及び素案について

－冒頭、本日の会議目標及び配布資料の説明を行う－

（委員長）

前回の委員会において、外国籍の方への取組の話があり、それを踏まえて資料6が加わっている。最終的に構想素案にこのことが盛り込まれるのか。

（事務局）

構想素案に盛り込むべきとの意見であればそのように考える。

（委員）

これは課題なので、[資料5]第6節「市立図書館が抱える課題」の中で示すべきであ

る。

(委員長)

今後、日本では外国籍の方が増えることが予想される。新しい図書館を整備するにあたり、委員会ではこのことを踏まえた議論になったので、構想素案に課題として加えていただきたい。

(委員)

この課題は、対応方法や費用負担のことが見えていないので、課題として挙げても、どのように解決していくのか、具体化できない恐れがある。行政側の立場として見ると、これは図書館だけではなく、行政全体の課題であると考え。委員からの貴重な意見であり、ぜひ課題として盛り込むべきである。

(委員長)

構想素案に盛り込んだ項目が、すべて具体化できるかということと必ずしもそうではないと考える。実態とかけ離れた構想素案を策定してもあまり意味はないが、確実にできることのみ盛り込むのも問題である。そのため、少々ハードルが高い課題や、しばらく先の段階で考えて欲しいことを盛り込むのであれば、外国籍の方との共生の問題は非常に重要であり、構想素案に盛り込んでいただきたい。

(委員)

「アート・ティーンズ」という聞き慣れない言葉がある。それ自体は素晴らしいことと考えるが、その意味するところについて、少々分かりづらいと感じる。その意味や込められた思いのようなところを教えていただきたい。

(事務局)

アートに関しては、「音楽の街ー狛江」事業と「絵手紙発祥の地」事業を絡めてアピールできればと考えている。ティーンズについては、10代、特にヤングアダルトと呼ばれる世代に対してどのようにアプローチしていくのが重要であると考えている。

(委員長)

[資料5]構想素案の第1章で狛江市が今まで培ってきたものとして、「音楽の街ー狛江」事業や「絵手紙発祥の地」事業を挙げているが、そのことをもう少し盛り込みつつ、さらにヤングアダルトと呼ばれる世代の利用について課題があることも指摘しておく、第2章で自然な流れで展開できると考える。

(委員)

[資料5]第2章の構想素案の説明箇所にもそのことが明記されていないから、分かりにくいのではないかと。委員長の指摘したことは構想素案に書かれているが、該当する項目の説明文で、そのことに触れずにアートと記載しているので分かりにくいと感じる。

(委員長)

見出しにも、「音楽の街ー狛江」や「絵手紙発祥の地」であることが分かるような表現とした方が良いと考える。

それでは、第2章の「新図書館整備基本構想」に移りたい。最初に、市立図書館が今後目指す方向性について、意見等はあるか。

(委員)

内容について意見はない。ただし、風呂敷を広げすぎている印象があり、ドキドキする感じはあまり受けない。サービス例が示されているが、これに対して市民がワクワクさせられるか気になるところである。

(委員長)

これを元にして、市民に説明やプレゼンをする際には、もう少しポイントが欲しいと思う。どこが大切かといった意見があれば、まとめるときにポイントが絞りやすくなるのではないか。

(委員)

検討委員会、ワークショップ及び中間報告会等の意見が一致している。様々な意見の中で共通しているのは、新設図書館と市民センター図書コーナーが一体で新図書館という定義が示されているが、インパクトが弱いのではないかという事である。非常に重要なところなので、そこを強調して欲しいというのが検討委員の共通認識なのではないかと考える。

(委員長)

[資料5]29 ページに、新図書館＝新設図書館＋市民センター図書コーナーと示されている。この右側のハイブリッドライブラリーというのは、それに加えて、各地域センターの図書室及び電子図書館ということだろう。

(委員)

施設の運営に関わることだが、新設図書館と市民センター図書コーナーが一体のものであることをメインに打ち出したほうが、教育委員会が市長部局に構想素案を提示する際にインパクトを与えることができ、市民にも分かりやすいと考える。中間報告会において、新しい場所に図書館を建設することに反対する方々も、そこは別ではないだろう、と話していた。ここは重要なポイントであり、新設図書館と市民センター図書コーナーは一体であるという意見が委員会から出ていることは報告している。

(委員長)

中間報告会において、新設図書館の整備に反対する意見があった中で、新設図書館と市民センター図書コーナーが一体のものだということについては反論がなかったということか。

(委員)

新設図書館そのものに反対する方々はあるが、その理由として、子ども関係のものが離れるということを挙げている。しかし、検討委員会では、場所は少し離れているが、一体的に運営し、単なるコーナーでは終わらせないで欲しいという意見が出ていた。検討委員会は、新設図書館と市民センター図書コーナーは一体の図書館との考えであるこ

とを、しっかり打ち出しておく必要があると考える。そのような意見を伺い、中央図書館をどのように考えていくかも含めて、その部分が一致したと思う。

(委員長)

今回、中央図書館という表現は使用していないと思うが。

(委員)

使用していない。そこにこだわる人もおり、様々な意見があって良いと思う。しかし、あくまでも市の中心的な役割の図書館としては、一体としての新図書館であり、別々に分館的な扱いはしないということをもっと強調すべきではないかと考える。

(委員長)

距離は85m縮まったが、施設設備の面積の問題があるので、分けざるを得ないだろうというのが委員会の議論であった。そのため、市民センター図書コーナーには小学生くらいまでの子ども向けの資料を中心に置くことにして、分担して2館として成立するように考えるという議論で進んでいる。それで良いのではないかと、後はそれをどのように表現したら分かりやすく伝わるかということと考える。

(副委員長)

市民の要望に利便性のことが挙がっているが、新設図書館と市民センター図書コーナーの2つに分かれることは、この要望に対して応えていないのではないかと。面積上の関係で仕方がない部分もあるが、新設図書館と市民センター図書コーナーの距離を徒歩約4分とは、誰を対象にしているのか。幼児と一緒にでは、とても4分では行けないと感じる。その不便さを市としてどのようにカバーしていくのか全く見えない。また、配慮が必要な方が、両施設を利用する際に、どのようなサービスで補っていくのか。その辺りが構想に示されていないと納得できない方もいるのではないかと。例えば、就学前の子どもたちを連れて市民センター図書コーナーにお母さんやお父さんが来館した際に、自分の読みたい本を借りたいときに、どのようにカバーするのか。車も2台しか停められない。そのあたりをどのようにカバーしていくのか示されていれば良いのではないかと。小中高生ワークショップの結果が[資料5]22ページに示されており、意見の概要に「資料に触れる」とか「調べ物相談」等がある。ただし、第2章のサービス計画の市民センター図書コーナーのところでは就学前の子どもたちについては具体的なイメージが書かれているが、小学生に対してはどのように「招く・触れる」、「遊ぶ・学ぶ」なのか、この段階ではイメージが持てない。小学生が学ぶことについて、この市民センター図書コーナーが一体どんなイメージになるのか、そのあたりの記述を少し増やしたほうが良いのではないかと。

(事務局)

想定では、市民センター図書コーナーは今までの図書館然とした図書館ではなく、幼児や小中学生が声を出しても良い図書館、来てもらえる図書館というコンセプトで位置付けている。例えば、委員の意見にあった子ども連れの保護者に対しては、今の想定で

は、ワンクッション置くことになるが、事前に予約した本を市民センター図書コーナーに回送して受け取ることが可能と考える。また、障がい等があり、配慮が必要な方については、介護認定等を受けていれば、配本サービスを利用することでケアできるのではないかと考えている。市民センター図書コーナーを利用していた小中学生が新設図書館へステップアップすることを、どのように橋渡しするかは検討の余地がある。そのためにティーンズコーナーを新設図書館に置き、若い世代に来て欲しいと考えている。

(委員長)

ティーンズコーナーだけでなく、もう少しローティーンや子育て中コーナーといった各年代層へのアプローチが必要と考える。例えば、新設図書館と市民センター図書コーナーに分担することについて、デジタルのサービスを使いながらカバーできないかという議論があった。広い図書館であれば子どもたちを児童サービスコーナーに行かせて、保護者は雑誌コーナーで自分の好きな本を見ることが可能である。分担することでそれができないのであれば、例えば館内貸出のタブレットで検索及び貸出を可能とする等、デジタルを活かしながら拠点が離れていることをカバーしようという発想が示されても良いのではないか。実際、何も無いところで行うというわけではなく、もう既に持っているわけだから、そこはサービス展開の仕方次第ではないか。また、指摘のあったティーンズに関してはアート、ミュージックのライブラリーがあるが、小学生等について体験的なサービス等を考えていくと良いのではないか。例えば小学校と連携しながら探究的な学習のワークショップを実施する、地域の図書室等と連携しながら多摩川について学ぶといったプログラムを組むことで学齢期の子どもたちを引き付けようという議論がされたと思う。そうしたことを活かしていくと、抜けている世代に対してのアプローチも出てくるのではないかと考える。

(委員)

委員長の意見は、今までの委員会であった議論をもう少し構想素案に示すべきということと考える。

(委員長)

今まで議論してきたことを、例えば[資料5]34 ページ以降のサービス例の中に位置付ければ、副委員長からの指摘に答えられると考える。また、他の委員の意見にあった、まちづくりへの貢献についてももう少し明記したいと考える。ここは、かなり時間をかけて議論してきた部分であると考えている。

(委員)

構想素案を見て、結局何がしたいのか、全てのニーズに応えようとして、何も見えてこない、そのような印象を受けた。図書館のニーズは、世代やターゲット層によって全く違うと考える。そのターゲット層によって課題とそれに対する解決策があると考えたときに、この構想素案の構成として、もう少しターゲット層を明確に出した上で、ターゲット層ごとの課題とそれに対する解決策といった構成にすると、例えば学生世代に対

して何が課題であり、市がそれをどう解決しようとしているのか、もう少し明確になるのではと感じた。

(委員長)

世代別のアピールをはっきりさせたほうが良いのではないかと、という意見である。しかし、一般的に基本構想はこのような構成で作られることが多い。これを読んでもらうための概要案や骨子に相当するようなものを作成し、もっと狛江市の中高生にはこのようにアピールする、子育て世代層はこのように利用できる等、基本構想では埋もれてしまうものをもっとアピールするように付け加えてはどうかと考える。

(委員)

どのターゲット層に向けてのサービスなのか、ビジュアル的にも明確に出せたら良いのではないかと考える。

(委員)

構想素案はきれいにまとまっているが、委員会で挙げられた様々な課題が、こうした概略の中で何かビジュアルな形で示すべきというのが、共通認識ではないか。

(委員)

最初からこのような形式で作成していく、というものがあれば良かったが、途中から形式やアプローチの仕方を変えるのは、作業的にも難しいと考える。例えば、意見のあった箇所を太字にする等、見せ方を変えることはできると考える。様々な事を書くより、キーワードを大きく見せる等、工夫できることはある。先に意見のあった、ティーンズ向けのサービスをこのように考えている、といったことが分かれば良いので、そのような整理の仕方をして良いのではないかと考える。

(委員長)

構想素案の構成を変えることは現段階では難しいだろうという意見である。最近の行政文書はあまり読まれないということを前提に、2枚程度のポンチ絵で概略を示して読んでもらう手法を採る。構成は基本的にはそのままにしながら、世代別やテーマ別のアピール等を抜き出して示せば良いのではないかと考える。

(委員)

新図書館を整備するにあたり、予算や場所等様々な問題から全ての要望を叶えるのは難しいと考える。その構成、例えば何処に何を配置するという建物の構造自体を根本的に変えていくことは難しいと理解しているが、例えばフェーズ1、フェーズ2、フェーズ3等と分けて、まずフェーズ1ではこのような形で打ち出していくと明確化し、続くフェーズ2で進化していくという形でフェーズ分けをするという見せ方もあるのではないかと考える。

(委員)

委員長の意見の通り、行政文書はあまり読まれないものであり、変えにくいことから追加資料で、ということかと思う。ただし、ターゲットを明確にすることに関しては、

具体的にどのようなシチュエーションが想像できるのか、この中には少し足りない気がする。例えば小学校では、一斉学習ではなく個別最適化のような学習が文科省から打ち出されており、一人ひとりが自分で課題を考えるという探究的な学習等が言われており、図書館がそれにどのように応えてくれるのか、教育的に問題になっている。そのようなシチュエーションになったときに果たして応えてくれるのか分からないが、シチュエーション別に示されていれば身近に感じると思う。委員の意見の中で、ティーンズと書きながらティーンズの記述が抜けていたりするとそこは置き去りなのかと受け取られてしまうので、具体的なシチュエーションが何処かで盛り込まれていれば、見る者に伝わりやすいのではと考える。

(事務局)

具体的な利用イメージをいくつか示し、その後にサービスの詳細を記載するという形が分かりやすいということか。

(委員)

シチュエーションが想像できるものが示されていれば、曖昧な印象を与えないのではないかと考える。

(委員)

狛江の図書館として何ができるのか、もっと大きく示すべきだと考える。例えば、市民がお互いにコミュニケーションを取り、集まることができて、個と個がマッチングして何かをやろうとか、子どもとお年寄りがマッチングして何かをやろうといったことができるのが図書館の良いところではないかと考えるが、そのような場所がない。図書館は世代を超えて出会える、その出会いをどのように図書館がコーディネートしていくのかにヒントがあると考え。しかし、あまりセグメントでシチュエーションを作りすぎてしまうとそこに陥ってしまうので、逆に小学生と高齢者が出会う場としてどんなことができるのか、あるいは狛江で商売を始めようとしている人と農家の人をマッチングしたらこうなるといった、何かサロンのような、そのようなキーワードが出てくると、個人的には行ってみようかなという気になる。図書館は本を読む場所から変化していると思うので、そのような要素が入ってくると非常に良いと考える。1プラス1が3にも4にもなるのが図書館である、といったことがあれば良いと考える。

(委員)

[資料5]27ページに今後の目指す方向性が示されている。「市民の学びや暮らしを彩り、狛江の実りを未来へつなぐ図書館」というテーマは良いと思う。この下に書いてあることを例えば表現を変えて、子どもたちへ、大人たちへ、あるいはまちづくりに関して等のカテゴリー別にして、未来をつなぐ図書館とはどういうものかを、委員の意見を盛り込んで示せば良いのではないかと考える。この表現がお役所的過ぎるから、ふわっとなんとなく良いことが書いてあるように見えて、インパクトがないのではないかと考える。

(委員)

要は見せ方の問題である。一番良いのは、未来につなぐということについてどのような考えを持っているのか、インパクトがある言葉をここに示せば良い。そして新図書館の物理的な面でのコンセプトは別なところに載せるべきで、例えば前提として場所は離れているが、新設図書館と市民センター図書コーナーは一体で新図書館と位置付けることを、このページの図書館全体のあり方の下に大きく置いて、その下に目指す方向性の3つの項目を少し整理して、先に意見があったような部分がよく分かるように、インパクトを出せば伝わるのではないかと考える。

(副委員長)

先に意見のあった、市民と市民をつなぐといったことは、既に先進的な図書館では実施しているところは多く、アメリカ等もそうである。これは、今まで狛江市の図書館が実施してきたことから遥かにイメージが変わる活動をしなくてはいけない。単なるレファレンスサービスではなく、コーディネーターのようなこともやらなくてはいけない。表現が適切ではないかもしれないが、そのようなことを新図書館整備基本構想に示して、取り組んでいくということなのか。

(委員)

行政や職員のことには気を遣っていただくことはありがたいが、新図書館整備基本構想は、今はできなくとも、このようなコンセプトをもってこれから未来に向けて取り組んで欲しいということを、この委員会の立場として打ち出し、市長部局に渡すものである。そのため、できるという約束ではなく、このようになって欲しいという内容を見せるべきと考える。

(委員)

未来は図書館や市が提示するだけでなく、そこに市民が関わってこないと作れない。ただこうして欲しい、ああして欲しいということだけではなく、市民も関わっていくべきであると考え。新しい図書館ができるので、本を通して、関係する人口を狛江市の中で増やしていくチャンスがあると考え。

(委員)

図書館の職員だけではなく市民協働で取り組む等方法はいくらでもあるが、どちらの方向に向かうのかをもっとしっかり示した方がよりインパクトがあるということではないか。

(副委員長)

図書館職員が全てを請け負うべきとは考えていない。人と人をつなぐことや、図書館が企画して講師を呼ぶといったことであると考え。そのような活動には様々な発想が必要で、例えば市民のボランティアみたいな形で活性化していく等、そのような発想も含まれるべきと考える。

(委員)

ここは方向性を示す箇所だから、こういう方向性であって欲しいということを示せば



良い。個々のやり方等、様々な課題があると思うが、委員会で出された方向性はインパクトのある形できちんと示すべきだと考える。個々の部分は、財政面や人員等、今後叶えていくべき事と考える。

(委員長)

資料の参考事例⑧に瀬戸内市民図書館がある。図書館が建設される前から、資料にあるもみわフレンズは活動している。先ほどフェーズを考えたかどうかという意見があったが、建物ができたときに図書館づくりが終わるわけではない。そこはスタートラインで、そこからどのように成長させるかという方向性をこの構想素案で出せば良い。そのため、作った時に何ができているかではなく、ここを拠点として、このようなことを考えてはどうかという提言がこの中でできていけば良い。例えば2つに分かれているが、上手にそれが一体になって運営できるように工夫していく、ということが我々の決意や希望として書かれていけば良く、ただの図書館ではなく、まちづくりに貢献するような、市民をつなげる仕掛けを市民参加でつくっていくことを我々の気持ちとして書けば良いと考える。

(委員)

町田市では、まちかど文庫という企画があり、理容店等が店舗の前に、ワイン箱サイズの本棚を出していて150店ほどが参加している。非常に素晴らしい取組だが、狛江市の場合、新設図書館と市民センター図書コーナーの2か所に分かれることを考えた場合、例えば途中にはJA、ラーメン屋及びパン屋等がある。そこだけではなく、もう少し広い範囲、市内で商売を営んでいる人や企業も含めて、町田市と同じような発想で、毎月変わる本棚等があるとしたら、2か所の図書館の間を歩くことが、狛江のブックストリートのような考えにつながるのではないかと思う。それは行政に実施してもらうのではなく、市民参加や企業へのアプローチといった動きが必要であると考えます。

(委員)

市内には、PTA 連合会、青少年委員、青年会議所、小中学校のおやじの会等、子どもや商売のサポートにおいて行政と繋がりのある団体が多く存在する。その中で市民参加がどのようにできるか、行政と一緒に何ができるかを考えた場合、様々な選択肢が考えられるのではないか。狛江市では、絵手紙やいかだレース等の事業を通して、喜んで市民参加する団体等は多く存在すると考える。そのような団体等と行政が共に図書館をつくり上げていくことは可能ではないかと考える。

(委員長)

今の意見は、まちづくりの拠点としてという部分と、行政だけに全てお願いするのではなく、市民が共に参加することをきちんと考えて成長させていこうという事である。

(委員)

今の話につながるが、[資料5]30 ページの一番下に、市民や地域との接点ということで、市民活動支援センターのことが示されている。市内の様々な活動をしている団体

を一番把握していて、動きが集約されているのは市民活動支援センターだと考える。PTAが関わっていない団体も数多くあると考えるが、基本構想素案では市民活動支援センターが引っ越してくるから、としか触れていない。人と人との出会い、本と人との出会いと書いてあるが、図書館が果たす役割を考えたときに、本と人との出会いはイメージできるが、人と人との出会いを図書館が作ることにについては、図書館の職員はコーディネーターの勉強をしているわけではないので、市民活動支援センターと一体的に動けたら、様々な広がりができるのではないかと考える。市民活動支援センターに相談に行った人に市民活動支援センターの職員が、関連する本が新設図書館にあると提案したり、新設図書館に相談に来た人を市民活動支援センターに問い合わせるよう促したり等、一体化した活動ができると良い。ここではさらなる市民や地域との協働の推進に向けた窓口を担います、と書いてあるだけで、まだ市民活動支援センターとすり合わせができていないから書けないのかもしれないが、もう少し連携の中身がわかると良いと考える。もう1点、アート・ティーンズライブラリーの「・」をどう理解して良いのか疑問である。結局それはライブラリーに係る言葉が3つあり、イノベーションとアートとティーンズ、ということだと考えていいのか。3つのものに力を入れるライブラリーということなら、「・」ではない表現のほうが良いのではないかと考える。

(委員長)

後半は質問なので、事務局にてお答え願いたい。私はイノベーションライブラリーとアート・ティーンズライブラリーという2つの事柄を示していると感じた。

(事業者)

イノベーションライブラリーで一つの括り、アート・ティーンズライブラリーで一つの括りとして、独立して整理している。アートとティーンズは両方ライブラリーに係る言葉ではあるが、アートの部分は音楽等ティーンズ世代にとって関心が高いものであるため、そこを一体的にアート・ティーンズとしてまとめたところである。

(委員)

機能や目的として示したものということか。

(事業者)

イノベーションとは別の機能として位置付けている。

(委員)

見た人が分かるように書かなければ、相手に伝わらないのではないかと。

(委員長)

この図書館が提供する資料やサービスが市民のイノベーションを活性化させ、中高生層に対してはアートの関心を高めるような、そのような事を考えている図書館であるとの考えだろうか。

(事業者)

イノベーションについてはICT関連や新しい学びについての情報等を得られるよう

な機能として考えている。

(委員)

今、説明された事が書かれていないから相手に伝わらないのではないか。

(事業者)

ICT 等については記載している。

(委員)

表現方法の問題だが、それが伝わるように書いたほうが良いと考える。

(委員長)

一般的に、イノベーションライブラリーやアート・ティーンズライブラリーという表現はあまり見かけないため、どういうことなのか定義を示さないと分からないのではないか。今日聞いて、なんとなく分かったが、はっきりと分からないという意見であった。そこは少し修正していただき、前半の問題はどのように考えるか。これは垣根があり難しい話ではないか。新図書館の整備に関するこの委員会だけでは言えないこともあるが、この意見は非常に重要と考える。先ほど言ったように、展望として、ここを拠点としてつなげていくことが望まれる、または構想されると良い等、そのような示し方が良いのではないか。

(事務局)

市民センター図書コーナー、公民館及び市民活動支援センターは同じ建物に入る。その相乗効果は考えられるので、その部分は上手く表現したいと考える。

(委員長)

建物が一体化されれば連携の可能性はもっと高まるだろう。

(委員)

[資料5]の43ページ、建物の配置案にフリースペースがあるが、市民活動支援センターと図書コーナーが一体化して動くようになれば、フリースペースが非常に有効に機能すると考える。このフリースペースは図書コーナーと市民活動支援センターの両方が交差してフリーに使えると考えて良いのか。

(事務局)

その通りである。公民館も含めたフリースペースであり、本を読む人もいれば公民館の利用に際して会話を楽しむ人もおり、また市民活動支援センター機能として人が集まる場所にもなるという考えである。

(委員長)

共用スペースとの位置付けと考える。

(委員)

新設図書館と市民センター図書コーナーの距離が400mから315mに変更になった理由を説明して欲しい。

(事務局)

ドアツードアで約 400m と確認していたが、詳細に調べたところ、不動産売買等の際に距離を測る場合には、敷地境から敷地境までを測ることになっている。それを踏まえると 315m となり、80m を 1 分で換算するので 4 分弱の計算になる。

(委員)

400m から 315m と距離が短くなるのは良いことだが、むしろ距離よりは運営で一体化を目指していくという方向性をはっきり示したほうが良いと考える。先ほど意見があったように、市民センター図書コーナーと新設図書館が、まちの中で一体として図書館になることを考えてはどうかということもぜひ書いて欲しい。まちじゅう図書館の取組は様々なところ行われており、そう難しいことではないと思う。商店や飲食店の中には、積極的に協力してくれる方が比較的多いと聞いている。そうなれば、子ども連れの方や障がいのある方のハードルが、気持ちの面では相当楽になると考える。

(委員長)

町田市の事例は、ダンボール 1 箱くらいのちょっとした図書コーナーをみんなで作るものだ。私の大学の学祭でも実施している。学生が先生から不要な本をもらい、また勝手に本棚から持ちだす等して、自分の図書館や本屋を作っている。すぐにそれに取り組むという話ではないが、そういった事例が考えられることを示すと、そういった活動ができるのではないかと市民も考える。

さて、構想素案で示されたことについては、質問やもう少し具体化して欲しいという要望はあったが、大枠では反対の意見は出ていない。ただし、アピールの仕方については一考の余地があるということで、まずは世代別のアピールを考えなければいけない。この中に埋もれている様々な工夫や委員会で議論した内容、事務局等で作成したものを世代別にアピールするような形でどのように見せていけば良いのか。もう 1 つはテーマである。まちづくりへの貢献や、利用が進まない中高生世代へのアピール等。難しい注文ではあるが、A4 サイズ 1 枚程度で、重点コンセプトを示したのを作ると良い。

(委員)

先ほど話があったが、フェーズに分けて考えては如何か。タイムラインのようなものを示すと理解しやすいのではないかと考える。

(委員長)

インドの図書館学者で有名なランガナタンは、「図書館は成長する有機体である」と言っている。学生向けのような話で申し訳ないが、それこそ狛江市立図書館は成長する有機体なのだろう。だから、スタートラインはこうなっているが、こう育っていけば良いと検討委員会が考えていることを示すのは必要である。

(委員)

様々な事を行います、という書き方ではなく、未来に向けて、といった表現等を挟めば良いのか。

(委員長)

委員会で議論していることは、10年、20年後に図書館が軸になって狛江市がどのようなまちになっていると良いかという話で、冒頭にあったワクワク感という話もそこにつながるのではないか。ワークショップの議論でも非常に良い意見があったと考える。

(委員)

「未来に向けて」といった囲みを作り、それをフェーズ分けすると、分かりやすくインパクトがあると考えます。

(委員長)

「一緒につくろう」、「育てよう狛江図書館」といったキャッチフレーズにして、重点や何年後の姿等、そのような形で見せていけば良いのではないかと。そうすれば、焦点化されて一体的に見えてくると考える。

(副委員長)

[資料5]34ページから40ページの下にサービス例が記載されているが、重複しているものが多くある。あくまで例であり、実現するとは限らないという話であったが、この書き方ではこのような事に取り組むのだなという印象を持つ人が多いと感じる。この書き方は非常に曖昧なので、実現できるものだけを整理して示したのが良いのではないかと。幼児向けのリトミックや童歌があり、また別のページには赤ちゃんコーナーを通じた事業等が示されているが、ここを見た人は確実に実現できることだと受け止め、あくまで例示で実現できない可能性があるとは思わないだろう。なので、もう少し精査して書くべきと考えます。

(委員長)

逆に、このような事ができたら良いという形で示す方法もある。

(副委員長)

そのほうが良いのではないかと。

(委員長)

サービス例というのと、どれを実際に実施するのかという話になるので、このような事を実施してはどうか、このような事を考えたい、といった書き方とするのが良いのではないかと。確実に実現できそうなものに絞ると、恐らく1つか2つ程度しか残らないと考える。検討委員会は構想を検討する立場なので、このような事ができたら良いのではないかとプッシュする立場である。サービス例という言葉だと決意を示してしまう。そうではなく、このような事を実施したい、このような事を実現させたい、といった表現が良いのではないかと。そうであれば、もう少し緩やかなものを書けると考える。そうでなければ、実現できることをきちんと整理して書くべきである。しかし、確実にできることを整理するのはかなり大変な作業であり、様々な部署と調整が必要であると考えます。

(委員)

確実にできることを記載する事は、政治でいうマニフェストみたいものだと考える。果たしてそれが実現できるか非常に曖昧であると思うが、曖昧な表現では不信感を持た

れるだろう。確実にできるところをしっかりと精査して記載する。そして、市民と行政がタグを組んで、このように一緒に育てて行きましょう、という形で打ち出すと、狛江市に越して来た人も、何か面白そうだ、参加してみようかと市民の中で輪が広がっていくのではないかと考える。

(委員長)

例えば[資料5]34ページのサービス例では何が実現可能か。1番上は確実に実現できそうだが、2番目は難しいのではないかと考える。開館時間帯について、勤務形態に関する事を人事部局がどのように考えているか等考慮する必要がある。3つ目はセルフ貸出機を購入できるかという予算の問題がある。ライブラリーコンサートは恐らく市内の中学校や高等学校の部活動と一緒にやりましょうといったレベルであれば実現できるかもしれない。このように、次回までに仕分けすることは可能だろうか。確実にできるものと、こんなことが考えられたら良いという、2つ程度のグレードに分けるのは如何か。

(委員)

検討してもらいたい、叶えてもらいたい事項等とするのはどうか。サービス例と書くから違和感が出ると考える。

(委員長)

難しいところで、私はそれで良いと考えるが、実際に狛江市で暮らす市民はどれが実現できるのか知りたいだろう、というのが委員の意見であるから、それなりに応えなければいけないと考える。例えば、表現の方法として、文章の上段に実現可能なものを示し、下段の枠はこれから検討したいところ、こうしたことが実現できれば良い、といった形の見出しに変えて棲み分けしてはどうか。予算等の調整が必要で、実現困難なことは下段で示し、新設図書館が開館した当初に実現可能なことを載せてはどうか。しかし、そのようにすると上段に書けることが少なくなるかもしれない。

(委員)

実現可能な事を「例えば」という表記にして、少し実現困難なことは下段に下げ、「他には」といった表現方法は如何か。

(委員長)

意見として出ているのは、具体的な整理が必要だという事である。そして、実現可能なものをきちんと示して欲しいという意見も出ている。また、検討して欲しい事や考えて欲しい事は仕分けすべきだという意見がある。その表現は事務局で検討してもらい、次の会議で確認するという事で如何か。具体例がない状態で議論しても結論が出ないのではないかと考える。すぐに実現可能な事とその他を仕分けしていただき、どのように修正したか、次回示して欲しい。

(委員)

小学校の立場から、37ページのサービス例を読んだときに、図書館がここまで考え

ているのかとワクワクした。科学教室やプログラミング教室の講座の開催、これを図書館主導でやってくれるのかという事である。子どもたちを図書館に集めるためには、ただ展示をしているだけ、ただ本を置いているだけでは、いずれ子どもたちは離れていく。しかし、このような講座があることで、子どもたちは集まるのではないかと考える。そこで興味を持って、こんな本があるのかと借りていく。そのような流れができると良いと考える。私は世田谷区、目黒、町田市等の学校を経験してきたが、そこには科学センターというものがあり、理科教員を中心に科学が好きな子どもたちが土曜日の午後に集まり、2時間ほど観察や実験を行っている。年20回ほど行われていて、子どもたちは本当に嬉々として集まる。狛江市にはそのような機会がないのが残念だと感じていたが、働き方改革の時代に学校側が新たなアクションを起こすことは難しいと考える。このことから、ぜひこれは精査しないで残していただき、いずれ実現して欲しいと考える。このような事が得意な市民は数多くいると考える。ぜひ子どもたちが喜んで科学やプログラミングに触れる機会をつくって欲しいと、熱い要望として挙げたい。

(委員長)

いずれは博物館や科学館に成長することを願いつつ、図書館を拠点にこのような事業を行い育てていく、という事で良いのではないかと。市内には学校の先生以外にもこのような事に精通している方がいるだろうから、まずは図書館が音頭を取り、声をかけて関わる人を増やしていくことは可能であると考え。ただし、現代の新しい図書館は本だけでなく、このような事に既に取り組んでいる。プログラミング教室や、ものづくりのスペースも備えている。

(委員)

児童・幼児のコーナーが市民センターに入ることで、今よりも少し広くなると思うが、33ページの蔵書冊数を見ると、今までの児童約21,000冊、開架と閉架を合わせると約32,000冊あったのが、約26,000冊に減っているように見える。これは十分な冊数なのか。

(事務局)

[資料5]33ページの表2-3にあるように、現在の中央図書館の開架では児童が約21,000冊、改修後の市民センター図書コーナーの開架が約26,000冊となっている。また、市役所の本庁舎地下書庫に約34,000冊を想定している。

(委員)

増えるという理解でよろしいか。

(事務局)

この面積を確保できれば、増えることになる。

(委員長)

合計で約60,000冊になるのか。

(事務局)

その通りである。

(委員長)

市役所本庁舎地下書庫は全て子ども向けの本を置くのか。

(事務局)

その方向で考えている。

(委員長)

それを示してはどうか。蔵書数を増やすことが以前から課題とされていて、少しずつではあるが努力して増やしているのだから、子どもの本が増えることを示せば、もっと喜んでもらえるだろうと考える。

(委員)

[資料5]41 ページだが、新設図書館の規模の問題もあり、多目的に使用する部屋をつくり、タイムシェアリング等を行わないと、スペースを確保できないのではないかと考える。ゾーニングの図は大雑把に書いてあり、どこに配置するかは詳細設計で出てくるのだろうが、そのスペースがあることをここで表現したほうが良いのではないか。

(委員)

図の上では1階は開架スペースだけになっていたが、ちょっとしたポップアップのイベントや企画展を開催するためのスペースはこの中に含まれるのか。入館したら全て書棚なのかと思ってしまう。

(事務局)

多目的室を設置する予定のため、そのまま入れていきたい。33 ページの冊数だが、現状、開架児童約 21,000 冊、閉架児童約 11,000 冊、市役所本庁舎地下書庫に約 19,000 冊あり、計約 51,000 冊が児童書である。新しい市民センター図書コーナーと本庁舎書庫を合計すると約 60,000 冊なので、約 51,000 冊から約 60,000 冊に増えるということになる。

(委員長)

今の事務局の説明は[資料5]33 ページの蔵書数の話で、その前の話は多目的スペースを明記したほうが良いのではないかという意見であった。他には意見はあるか。

(委員)

名称について、今は新設図書館と市民センター図書コーナーとなっているが、このまま進むのか、この名前を変えていくのかは次の課題なのか。名称は注目度の高い部分であり、そのために事例等も調べているのかと思うが、事務局の考えを次回示してもらおうという理解でよろしいか。

(事務局)

32 ページの中段に、「今後は新図書館にこれらのコンセプトを表す愛称を付け、より一層愛される施設としての実現を目指します」と示しているが、もう少し目立たせるよう検討する。



(委員長)

愛称は市民から募集する場合もあれば、お金と引き換えに企業に名付けさせる方法もあるが、ネーミングライツ制度を図書館が行っているところはあまり評判がよくないと聞いている。

(委員)

次の委員会で、委員に案を出してもらっても良いのではないか。

(委員長)

市民から募集するのも一つの手だろうが、1番来て欲しい人たちにアピールするような決め方が良いと考える。中高生に来て欲しいのであれば中高生にヒアリングする、あるいは投票してもらうのも一つの手だろう。様々な決め方があると思うが、トップダウンで決めてしまうのではなく、現時点では公募や準公募のような方法で決めていくと考えて良いか。

(事務局)

基本構想の中では愛称を付けるところまでとし、例示として案を出せると良いのではないかと考えている。

(委員長)

多くの市民等にネーミングを考えてもらうことを通じて、より関心を持ってもらうのが良いのではないかと考える。

(委員)

狛江第一小学校の150周年のキャラクターを児童から募集して、そのキャラクターが完成したことが学校で話題になっていた。そのことから、ネーミング募集自体が話題になると良いと考える。

(委員長)

マスコットをつくり、それをきっかけにする事例はある。それも一つの手だろう。様々な意見が出たが、今回の議論はこのあたりで締めくくってよろしいか。それでは本日の検討委員会はこれにて終了とする。